

2025 年 度
一 般 選 抜 試 験 問 題

国 語

(60 分)

(100 点)

注 意 事 項

1. 試験開始の指示があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 工学部は、国語・英語のいずれか 1 教科を選択、感性デザイン学部は、国語・英語・数学の中から 2 教科を選択して解答しなさい。
3. 問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁等がある場合は、手を挙げて試験監督者に知らせなさい。
4. 筆記用具は、黒鉛筆または黒のシャープペンシルに限ります。
5. 解答用紙に受験番号を記入しなさい。
6. 解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
7. 試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

第1問

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。ただし、出題の都合上、出典の文章を一部変更したところがある。(配点 48)

「もって生まれた独創性を、ほんの幼い頃からあまりにもしばしば気づかずに抑圧してきた結果、われわれは自分のもっている可能性について十分に考えようという勇氣をもたないのが習慣になってしまった」(B・フラー)。

残念ながら二十世紀文明はその根本に、人類の可能性を矮小化する思想をはらんでいたのかもしれない。

それは「人間中心」思想の陰に、「人間不信」と「人間蔑視」を隠しもった文明だった。人間の内的な技能や感覚を、ますます自動化された機械技術と計測(数値)で代替していった時代——そこに生きる人間は、科学技術から多くの利便性と権能を獲得しつつ、地球の支配者として、^a クンリンしていったようにみえて、自己の存在の根拠をますます他者、機械に委譲することにもなった。

もとより西欧キリスト教社会の「神と人間の圧倒的な非対称」の構造のなかに成立し、神にかわって玉座に座ることになった機械技術(宗教を否定した共産主義社会でも科学と機械技術はほとんど「神」の座にあった)は、はじめから人間に対して圧倒的な優位性を約束されていた。

ガリレオにとっての望遠鏡(「天界の真実を開示する窓」にしても、デカルトにとっての数学という飛び道具にしても、ルネサンス以降の人間の理性が「神」から自立するための不可欠の便^{よすが}であった(それなくして近代人は「聖書」＝神の^b ケイジから自立しえなかった)。神の完全なる知性にくらべて圧倒的に不完全で不確実な人間理性——それが神の恩寵と聖書によるお墨付きもなしに、いったい何を根拠に独り立ちして、世界認識と自己の存在の「確実性」を担保していけるのか？

デカルトの「我思うゆえに我あり」もカントの「純粋理性批判」もニュートンの万有引力に関する「根本原理」も、⁽¹⁾ こうした究極の根拠を発見するための苦闘の過程であった。デカルトの「方法序説」などを一読すればわかるように、それは不確実な人間の感覚や直感への不信と(「目に見えるものを信じるな!」)、人間が確実な認識の拠り所をいかに獲得しうるか? という根源的な問いかけに貫かれており、それへの回答として発見された数学と論理学が、あらゆる近代思想と近代人の規範を導く根拠

となった。

それが以後の三百年にわたり人類の大きな跳躍をもたらすジャンプ台となったものの、それははじめから科学技術に対する人間の依存（従属）を前提とした構造にほかならなかった。自分のからだの感覚よりも血圧計や数値を信じ、「X」という現代人の思考・行動様式は、たんに便利な機械に囲まれて育ったというだけではない、もっと根源的な科学信仰とその裏返しとしての「人間不信」によって条件づけられている。

もとより世界をみるあらたな。カインズ度をもたらず科学の可能性を否定するつもりはない。だが、過剰なまでの科学技術への信仰は、私たちの存在そのものを否定しかねないアンバランスなものだ。それは「神」の代替物であったという点に由来し、科学技術に与えられた特権性は、近代人の神から自立する不安と劣等感（非対称性）の裏返しにほかならない。

映画『モダン・タイムス』でチャップリンが自動化・機械化時代の人間の危機を批判したように、あるいはガンディやシューマッハーが「人間の能力を尊重し拡張する器械技術」と「人間能力を代替し愚弄する機械技術」のちがいを明らかにしたように、人間を生きるための労働から解放する手段となるはずだった技術文明は、多くの場合、人間から生きる歓びを奪い、人間の尊厳が担保される場所を縮小させる結果を招いた。

また逆説的なことだが、人間を「悪」として排除する自然保護思想や、二十世紀の技術文明の「影」に対して向けられる罪悪感・ペシミズムも、近代技術文明の否定という見かけとは裏腹に、実は二十世紀文明の核心にビルトインされた「人間蔑視」と「人間不信」のストレートな。ハンエイとみるべきかもしれない。

核の脅威や環境破壊など、人間を「地球のガン」であるかのように見てあげくの果てに「人間は地球を必要としているが、地球は人間を必要としない」などと。うそぶくような「自己否定癖」は、神との関係における圧倒的な非対称（＝科学技術に対する人間の圧倒的劣位）に由来するのではないか。そうでなければ、私たち人間でなく「核」や「化学物質」という科学技術のほうを否定すればよいはずなのだ。人間は「脱衣の自由」をもっているはずなのだから、自分で着た技術や制度という服を自分で脱げばよいだけなのだ。なのに、その服を否定するのではなく自分自身を否定するというのは、はじめから主体（主権）は²あちら側にあるから、否定しえない神としてあるからではないか？

もう一つ、これとあいまって、近代文明のありかたを根底で規定する「文化の型」について眼を向ける必要があるだろう。

つまり、西欧近代の文化のパターンとして、「人間不在」の技術文明を育む傾向が内在していたのではないか？あるいは文化の型として、西欧近代の文化は「人間を必要としない」（人間の内的な能力や熟練を必要としない）「人間非依存型」の技術を育むベースがあったのではないか？ということだ。

問題をわかりやすく示すために、極端な比較例でまずインドを取りあげてみよう。IT分野で躍進するインドは、BRICSと称される新興四国のなかでもその生産物の「知的集約度」が群を抜いている。石油や大豆など原材料輸出への依存度が高いロシアやブラジル、大量・安価な石炭を使った工業生産の中国と違い、インドのエンジンは何よりその知的創造性であり、その資本は高度な技能を蓄積した「人間資本」といえる。

さすがゼロを発見した民族！などと納得されがちだが、重要なのはそれがほんの一握りの理数系エリートだけでなく、最下層のスラム住民まで含めた国民の広い層にわたって、そうした人間の知的能力を評価し伸ばしていこうという基本的な志向がある点だ。そこには英語やITといった表面的な問題を越えた、もつと根源的な文明の「型」が関係しているように思われる。一言でいえば、インドは数千年の昔から「人間開発型」の文明を築いてきたということだ。

たとえば美しいドレープが印象的なインドの民族服サリーは、実は一枚の布にすぎない。つまり布をからだに巻きつけただけの、衣服としてはもつとも原始的なもの。だから手を通せば着れる洋服とちがって、サリーは着る人間の側に高度な技能を要求する。しかし着る側にソフトウエアがあれば、サリーは洋服以上に自由で多様な着こなしができる。状況に応じて巻き方やドレープの作り方を変えたり、布のあまった部分で砂埃や日差しをよけたり、寒がつている子どもを覆って抱いたりもできる。

つまりサリーは「人間の内的な技能の開発・蓄積を促す服」であり、文化の型として「人間開発型」——つまりソフトウエアが道具や機械の側に「外化」されるのではなく人間の内部に蓄積されるような文化パターンを形成している。そして、モノ（道具）としては原始的で簡素でも、人間と道具の関係の総体としてみれば、極めて洗練された服飾文化を形成している。

この対比は、箸とフォークのちがいでもある。箸はたんなる二本の棒にすぎない。道具にソフトウエアを「外化」して、切る・刺すなど個別に機能特化したナイフ・フォークに比べれば、道具としての進歩の跡がみられない原始的なもの。でも、使う人間の

側の熟練により、この二本の棒はナイフにもフォークにもなり、単純さのなかに優美な複雑さを醸し出す知的ゲームとなる。インドでは箸はより非物質化して人間自身の指となり、まったく道具を使わずに汁物のカレーすら見事にすくって食べるという、完全に人間の内部のソフトウェアに依存した魔術となっている。

人間が何の内的知性や技能の蓄積をもたずとも（Ⅱつまりどんなにバカでも）、スイッチポンで何でもできてしまうような道具の進歩を「文明の尺度」として考えるなら、インドは文明国ではない。しかし人間自身の開発度を進歩の尺度とするなら、評価はまったくちがってくる。

インド独立の父・ガンディは、イギリスの大量生産の綿製品に対抗して、インドの伝統的な手仕事（手まわしの糸紡ぎ）による小さな革命を提唱した。それは産業革命以来ますます機械に依存し、人間のあらゆる機能や労働を道具に外化（Ⅱ代替）することによって人間を疎外しつつあった近代文明に対して、人間の内的なソフトウェアに価値をおく文明の提唱でもあったと思う。

そうした「人間開発型」の文明ビジョンは、工業社会ではミサイルと闘う竹槍に見えただろうが、人間の知的創造性が価値生産の中核となる情報社会においては、何より巨大な フリス となるだろう。ITで躍進するインドの発展の基盤は、何千年の歴史のなかで培われた知的文明の蓄積と、こうした日常的な人の営みのなかに生きる文化の型にこそある。

とはいえ、ここは二十一世紀・情報知財社会におけるインドの優位性を説くことが目的ではない。むしろここで浮上するのは、③近代西欧文明がどのような「型」の文明であったのか？　そこで提示されてきた「進歩」観や技術思想は果たしてほんとうに普遍的（ユニバーサル）であったのか？　という問いだ。近代西欧文明が世界を覆うことによって、何に価値が置かれ、逆に何が捨

象されてきたのか？　それは、西欧近代文明が世界を席卷した根源的な理由を明らかにすることでもある。

ポイントは、非「人間依存型」の道具・機械文明つまりスイッチポンで何でもできてしまう、逆に言えば使い手・主体の技能に依存しないがゆえに、世界中どこでもだれがやっても同じ結果が出る（Ⅱユニバーサルデザイン）。A、西欧近代文明は世

界中に広がったのだ。B、現象的に世界に広がりやすいことと、こうした「人間非依存型」の文明自体に「普遍性」があるかどうかは別の話だ。

C、属人的な技能や尺度をこえた普遍的・客観的な地平で世界を記述し、それを技術として「外化」しえたからこそ、世界

中がその科学技術の果実を恩恵として受けることができた。D、その普遍性と外化志向が極端なまでに推し進められた結果、技術は人間の知的・感覚的な熟練をますます必要としない方向へと進歩し、結果として「人間不在の、人間を必要としない」機械・技術の方向へと進展していった。

これは構造的に「人間を（より）バカにする」機械技術 ^gパラダイムであり、ある意味で「人間をバカにした」技術文明を育むこととなった。

人間「開発」より人間「代替」型のテクノロジーは、人類をつらい労働から解放して、より知的でクリエイティブな仕事に集中する自由をもたらすというのが二十世紀の神学であったが、結果はほんの一握りの知的集約型産業従事者（シンボル・アナリスト）と、何十億もの知的創造と熟練の日常回路から疎外された ⁽⁴⁾大衆を産むことになった。

便利な家電製品から道案内のカーナビまで、自動化され情報化された機械環境のなかで、私たちの基本的な知的能力や個性や創造性はますます必要とされないものとなり、その成り立ちやメカニズムがまったくわからないブラックボックス社会のなかで、一人ひとりが自らの知性で問題を解決しうる（あるいはする必要はある）という基本的な感覚が去勢されていったのが二十世紀の産業社会だった。

そして、この感覚はいうまでもなく、先に述べた神学的な次元での「人間不信（蔑視）」の問題に接続してゆく。

現代の地球環境危機——文明と人間そのものの持続可能性の危機のなかで、その解決の方途と具体的な鍵まで手にしつつあるにもかかわらず、どこか通奏低音のような無力感と不作為のトーンが ^h蔓延しているように感じられる根底には、こうした近代文明の本質に関わる「人間観」の問題があるのではないだろうか？

だが一方で、現代はこれまでの人間蔑視を超えた「人間中心」の文明をあらためて構築する黎明期 ^{れいめい}としての条件が整いつつあるのも事実だ。

たとえばAIやロボット技術が進歩するほどに、それらがどんなに発達しても到底及びもつかないほど高度な「人間」の脳やからだの情報処理能力（知的創造性）が逆にクローズアップされつつある（山の高さはこちらが高い所に登ってはじめてわかるものだ）。

コンピュータやAIロボットを発達させて人間の機能や仕事を「代替」させるかわりに、当の人間自身の潜在能力をより「拡張」「開発」するようなたちでコンピュータやロボット技術を使おうという方向に、技術パラダイムも大きく転換しつつある。神の知性の模倣ともいうべきデジタル・コンピューティングへの信仰（「ユダヤ的デジタル知性」…西垣通氏）を超えてゆく鍵として、多くの人が「からだの知」「非局在的な脳としての身体」に着目するのも、こうした「新たな人間の発見」への胎動といえる。

また工業社会の成熟で、実際に単純な機械労働は文字どおり工作機械やコンピュータやロボットに任せるようになり、人間は人間にしかできないことに専念できる素地が生まれつつある。人間が機械の都合と基準にあわせて作業し、人間自身ができるだけ精確な「機械になる」ことを求められた、人間資本浪費型の「モダン・タイムス」はようやく終焉の兆しをみせつつある。

かつては「モノの規格大量生産」のために「人間の規格大量生産」が必要で、学校や軍隊がそうした人間工場として機能してきた。そこでは人間一人ひとりの個性や知的創造性は、マスのレベルで要求される余地はなかった。

しかしポスト工業社会で「知財」と「人財」に価値生産の焦点が移行し、人間のcreativityを最大のリソースとする文明がようやく始まろうとするいま、教育や医療、労働の意味や目的も大きく変わりつつある（こうした流れは、ライシュ『ザ・ワーク・オブ・ネーションズ』やP・ドラッカーの著作に十年以上前から描写されてきた）。

インターネットに象徴される新しい情報環境も、こうした方向での社会経済の変化を加速する大きな原動力となった。そこでは人間の知的創造性、あるいは個性と多様性に基づく新たな価値生産こそが唯一の生産的資源となる。

交通・通信のコミュニケーションがそれほど発達しておらず、人々のもつ情報や手段に「非対称性」があった頃には、ただ右のものを左に運んで販売するだけの単純な商売やサービスが成り立ちえた。しかし、いまやだれでもグーグルで必要な情報を検索し、アマゾンで本を世界から注文し、kakaku.comで一番安い店をリアルタイムで比較検討し、十四歳の子どもが世界の大人のクリエイターを動かして新たなサービスを創出する——こんな時代には、ただ本を並べているだけの本屋や、切符の発行を代替するだけの旅行代理店などはもはや成り立たない。

そこで唯一存在価値を担保できるのは、たとえば「あそこに行けば自分の好きなジャンルの本は必ずある」といった個性的な

編集力をもった本屋（秋葉原が世界中から人をひきつける魅力をもつのは、電気製品やサブカルチャーでこうした特権的な編集トポスとなっているからだ）。あるいは、豊富な経験資源にもとづいて、ほかのだれも計画できないような個性的な旅を提案できるコンサルテーションビジネス。——いわばDJやソムリエのような、情報の海のなかから新たな価値（意味）を浮上させるようなクリエイティブな編集能力をもったプラットフォームなのだ。

そこでのリソースは、モノでもデータでもコンピュータのような機械でもなく、あくまで生身の「人間」にほかならない。ウィキペディア的な知識やデータや流通サービスならだれもが同等にアクセスできるので、価値を担保するのは当然、個人の固有の個性や経験資源に基づく価値創造の能力しかない（原文人著『21世紀の国富論』、あるいは天野敦之著『価値を創造する会計』はこうした観点から人間の価値創造性に基づく新たな企業や経営の考え方を提示している）。

こうして人類史上はじめて、マスの人間が知的創造性を要求される、人間（個人）による価値創造が唯一の生産資源になる時代がやってきたのだ。

人類が直立歩行しはじめて五百万年、現生人類（ホモ・サピエンス・サピエンス）がアフリカを出て世界に広がりはじめて五万年、いまようやく人類史上はじめてマスのレベルで人間固有の創造性を正当に評価して、それを社会的リソースとして生かす「人間らしい文明」をデザインするチャンスが到来している——。

また、ようやく「神」＝「機械」の完全性へのナイーブな信仰から自由になり、人間と科学技術の限定性を自覚しつつある人間は、新たな地点から地球のなかの／宇宙のなかの人間の可能性を模索しようとしている。

人類はたしかに地球の自己調律システムに変調をもたらすほど巨大な存在にはなったが、この惑星の複雑なメカニズムを治療したり、それを代替しうるほどに大きな力は到底もちえていないことも理解しつつある。また遺伝子レベルから生命を操作する力をえたが、生命をゼロから創りだしたり、それに匹敵する人工物をつくることは到底できないと認識するほどには謙虚になった。

かつて近代合理主義は、人間が開墾・開発していない「荒野」wasteはすなわち役に立たない「無駄」wasteであり、生命圏を人間圏に捕獲・馴化することに「人間の自由」の根拠を見出していた（たとえばジョン・ロック）。だが現在の私たちはようや

く、手つかずの自然は何の役にも立たないどころか、たとえば「治水・保水機能を果たす立木は材木の三倍の価値がある」（長江の大洪水で三兆円の被害がでた後の中国環境相）とコメントする程度にはまっとうな感覚を取り戻しつつある。

けっして他の動植物や自然に対する人間の優位性という意味での「人間中心主義」ではなく、その裏返しとしての「人間不信」でもなく、あらためて人間の知性のもつ可能性とそれに対するまっとうなリスpekトを基軸に置いた、^⑤ 本当の意味での「人間の文明」が、いまようやく始まろうとしている。

そして、この地球という惑星の精妙さと、「生木に花咲くに驚く」ように生命の奇跡と、それを認識する人間の知的能力の貴重さに気づきはじめた人類は、こうした「生きることへの礼儀」、あるいはこの世界と自分自身へのリスpekトを、新たなかたちで地球市民のコモンセンス（共通感覚）として再構築しうる時を迎えているのかもしれない。

（出典 竹村真一著『地球の目線 環境文明の日本ビジョン』PHP新書）

問1 二重傍線部 a～d について、次の太線部分に相当する漢字を含むものを、それぞれア～エから一つずつ選び、その記号を解答欄に記せ。

a クンリン		b ケイジ	
ア	リンリ学を専攻する	ア	一筆ケイジョウ申し上げます
イ	キンリン住民の話を聞く	イ	最近使われたケイセキがある
ウ	フウリンの涼やかな音色	ウ	電子ケイジ板でニュースを見る
エ	式典にごリンセキください	エ	子どもの頃は内ベンケイだった
c カイゾウ		d ハンエイ	
ア	大水で橋がホウカイした	ア	金メダルのエイカンに輝く
イ	空き家をカイタイする	イ	新作エイガが公開される
ウ	手紙をカイフウする	ウ	インエイに富んだ絵画
エ	熊の出没にケイカイする	エ	国内外のエイチを結集する

問 2 傍線部(1)「こうした究極の根拠」とは何か。その指す内容を、本文中の言葉を用いて、解答欄に合うように、三十五字以内で説明せよ。読点等も一字と数える。

問 3 二重傍線部 e、h の本文での意味として最も適当なものを、それぞれア、エから一つずつ選び、その記号を解答欄に記せ。

- | | | | | |
|-----------|------------|-----------|------------|-----------|
| e 「うそぶく」 | ア 平然と言う | イ 遠慮して言う | ウ 虚偽を述べる | エ 批判的に言う |
| f 「リソース」 | ア 再利用 | イ 仕事 | ウ 味付け | エ 資源 |
| g 「パラダイム」 | ア 天国 | イ 信仰 | ウ 認識の枠組み | エ 社会の変革 |
| h 「蔓延して」 | ア 広範囲に広がって | イ 徐々に流行して | ウ 負の影響を与えて | エ 勢力を拡大して |

問 4 空欄「X」に入る文として最も適当なものを、ア、エから一つ選び、その記号を解答欄に記せ。

- ア 冷蔵庫の食品がまだ食べられるかどうかを自分の鼻と舌でなく「賞味期限」の数字に頼って判断する
- イ 使用中のプリンタにエラーが出たら取扱説明書をひっぱり出して自力でどうにか修理する
- ウ 大雨災害発生の危険度が急激に高まるとの予測に基づき役所の指示に従って避難する
- エ 書類の整理やデータ入力など人間が手作業で行っていた仕事を AI に任せる

問 5 傍線部(2)「あちら側」が指しているのは何か。本文中から探し、四文字で抜き出して解答欄に記せ。

問 6 傍線部(3)「近代西欧文明がどのような『型』の文明であったのか」についてまとめた次表の空欄「①」～「④」にあてはまる語句として最も適当なものを、それぞれ本文中から一語で抜き出してそれぞれ解答欄に記せ。なお、同じ記号の空欄

には同じ語句が入る。

西欧近代の文明やテクノロジーの特徴		インドの文明やテクノロジーの特徴	
ソフトウェアが道具や機械の側に「①」される文化パターン		人間の内的な技能の開発・蓄積を促す文化パターン	
食事にナイフやフォークを使う		道具を使わずに指で食べる	
人間の機能や労働を道具に「①」することで人間を疎外する		人間の内的なソフトウェアに価値をおく	
人間「「②」」型・非「人間「③」」型の文明		人間「「④」」型・「人間「③」」型の文明	

問 7 空欄 A D に入る語句の組み合わせとして最も適当なものを、ア～エから一つ選び、その記号を解答欄に記せ。

- ア

A

ところが

B

だが

C

もちろん

D

だから
- イ

A

ゆえに

B

だが

C

そして

D

だから
- ウ

A

そして

B

ゆえに

C

だが

D

もちろん
- エ

A

だから

B

だが

C

もちろん

D

だが

問 8 傍線部(4)「大衆」の言い換え部分を本文中から探し、五文字以内で抜き出して解答欄に記せ。

問9 傍線部(5)「本当の意味での『人間の文明』」とはどのようなものか。説明した次の文の空欄(①)～(③)にあては

まる語句として最も適当なものを、それぞれ本文中から一語で抜き出してそれぞれ解答欄に記せ。

他の動植物や自然に対して人間が優位だとみなす「人間(①)主義」に基づく文明や、自動化・情報化された機械環境のなかで人間の知的創造性が必要とされない「人間(②)」の文明ではなく、人間が知的創造性を要求される、人間による価値創造が唯一の「③」的資源になるような文明

第2問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。ただし、出題の都合上、出典の文章を一部変更したところがある。(配点 12)

現代の都市計画には、どこか重大なまちがある。少なくとも過去一〇〇年間、都市計画は基本的に、景観を消し去り、地勢を平らにして均等化し、水路を埋めたり流れを変更し、車によるアクセスが最適になるような論理で道路を建設してきた。現代の都市は、ほかの都市や景観に隣接して配置された部分や断片にすぎず、そこには本当の意味でのつながりは存在していない。

都市の設計は庭づくりのようになされるべきだ。すでにそこに存在する生き物を有効に活用し、人間のためのスペースをつくりつつも、人間が自然に依存していることを忘れさせない形でそれを行うこと。一切合切を除去したり、「改良」したりするのはなく、穏やかなペースで計画し、少しずつ調節していくプロセスを、私たちはもう一度学び直す必要がある。そのように計画された江戸のような都市でも、多数の人口と複雑な経済活動、そして交通網を支えることは可能なのだ。

一八世紀半ばには、江戸は世界でただ一つの一〇〇万人都市だった。今から一〇〇年前でも一〇〇万人を超える都市はほんの数カ所にすぎなかったが、今日ではその数は四〇〇を超え、一〇〇〇万人以上の人口を擁する都市も二〇を数える。都市の人口密度が高くなれば、大量の食べ物や水、エネルギー、原材料が必要になり、それらから生じるゴミの処理もしなければならぬ。

こうした資源を徐々に遠方から——大陸を横断して、さらには海を横断して——調達するようになるに従い、都市部の住民は自分たちの周囲の自然の生態系や、住んでいる土地の環境収容能力に無関心になり、周辺の自然と結びついているという感覚や

それに対する責任感も希薄になっていく。

江戸のように都市が周囲の生態系に十分な配慮をもって溶け込むことは、生態系と住民の両方に明らかな利益をもたらす。こうした都市は自然の力を使って適切な温度を保ち、都市部にも豊富で多様な樹木が生い茂り、都市内部での食物生産が可能で、質の良い水を安定して供給することもできる。そのカギは、人間の居住地と自然のシステムがどのように相互に依存する機能的な統一体を構成するかを理解し、可能なかぎり自然の摂理に手をかけないことにある。実際、⁽¹⁾これはガーデニングにとってもよく似ているのだ。

かつて江戸や大坂、名古屋などの日本の都市の水路は、ベネチアやアムステルダムに匹敵する質と規模をもっていた。だが、こうした水路網は二〇世紀を通じて衰退し、そのほとんどはコンクリートで埋められて道路となり、残ったものも見栄えが悪かったり利用できなかったりする。だが一九八〇年代の好況下で、都市水路を憩いの場として復活させ、資産価値の増大につなげようという取り組みが始まり、実際の成功例はごく少ないものの、こうした構想を前向きに検討している都市は少なくない。

失われた都市水路のなかでも大いに悔やまれるのは、日本橋川だ。この川はかつては江戸のまさに中心であり、一九六〇年代初めまではその姿をとどめていた。しかし、一九六四年の東京オリンピックピックに向けて真上に首都高速道路が建設されたことで、歴史ある日本橋ともども薄暗い陰のなかに追いやられ、以前の美しさを失ってしまった。

そんなわけで、首都高を地下に移設し、日本橋と日本橋川を復活させるという計画が真剣に検討されていることは心強いかもしれない。計画はまだ具体化には至っていないが、自治体や地元企業、住民、観光関連団体など主な利害関係者は、そろってこの計画に前向きな姿勢を示している。これは、実用価値のある水路をもつことの重要性を認識し、橋や町並みなど都市の歴史的要素がもつ文化的意義を理解していることの喜ばしい証しだといえる。⁽²⁾こうした計画は大いに奨励されるべきである。

(出典 アズビー・ブラウン 『江戸に学ぶエコ生活術』 阪急コミュニケーションズ)

問 1 二重傍線部「擁する」の本文での意味にあてはまるものを、ア～エから一つ選び、その記号を解答欄に記せ。

国語

ア かかえる イ ほこる ウ みたす エ こえる

問2 傍線部(1)「これはガーデニングにとってもよく似ているのだ」について、なぜ筆者がそのように考えているのか、本文中の言葉を用いて、解答欄に合うように七十字から八十字以内で答えよ。読点等も一字と数える。

問3 傍線部(2)「こうした計画」とは何を指しているか。本文中から探し、過不足なく抜き出して解答欄に記せ。

第3問 次の(1)～(5)の傍線を引いたカタカナの部分に漢字に直し、解答欄に記せ。(配点 10)

- (1) 台風で家がトウカイする。 (2) 白組をヒキいる大物歌手。 (3) 彼女と話すのはキンチョウする。
- (4) 犯人の手口はコウミョウだった。 (5) ミジンコはコウカク類に属する。

第4問 次の(1)～(5)の傍線を引いたカタカナの部分であらわす漢字として最も適当なものを、それぞれア～ウから一つずつ選び、その記号を解答欄に記せ。(配点 10)

- | | | | | | | | |
|-----|------------------------|---|----|---|----|---|----|
| (1) | 教科書の内容をカイテイした。 | ア | 改定 | イ | 海程 | ウ | 改訂 |
| (2) | 警察から身元シヨウカイの依頼があった。 | ア | 照会 | イ | 商会 | ウ | 詳解 |
| (3) | 釣り用のヘンコウサングラスが欲しい。 | ア | 偏向 | イ | 偏光 | ウ | 変項 |
| (4) | 床下に水がシンニョウしてきた。 | ア | 進入 | イ | 侵入 | ウ | 浸入 |
| (5) | 権力者というイコウを笠に着たふるまいをする。 | ア | 威光 | イ | 意向 | ウ | 遺功 |

第5問

次の(1)～(5)の傍線部の読み方を解答欄に記せ。(配点 10)

- (1) 古民家の囲炉裏に集まる。
 (2) 舞台の台詞を覚える。
 (3) 気持ちが滅入る。
 (4) 新たに税金を賦課する。
 (5) 旧弊を払拭する。

第6問

次の(1)～(5)の四字熟語の にはそれぞれ同じ漢字が入る。その漢字として最も適当なものを、それぞれア～クから一つずつ選び、その記号を解答欄に記せ。(配点 10)

- (1) 頭
 (2) 利
 (3) 存
 (4) 理
 (5) 残 無 略
 (5) 尾
 (5) 栄

ア 無 イ 自 ウ 空 エ 党 オ 一 カ 共 キ 念 ク 徹

